

学校教育における立山登山の歴史

－小学校を主として－

高木三郎*

はじめに

富山県では、立山に登って一人前と見なす風習が古くからあったといわれている。立山登山を目標に家庭教育が行われてきたと証言する人もいる(1)。また、県下の数多くの小・中学校が立山登山を学校行事として行ってきた歴史をもっていて、現在でも約三分の一近くの小学校が立山登山を実施している。このように、富山県では、立山登山を教育の一環として行ってきた歴史がある。しかし、江戸時代を中心とする禪定登山や明治以降の近代登山としての立山登山については、数多くの研究が行われてきたが、学校教育における立山登山の歴史について考察したものは、各学校の校史等でふれられた以外は見あたらない。

この機会を利用して、立山登山が、どのような教育的意義を唱えて学校教育に取り入れられ、どのような経過をたどってきたのかを探ってみたい。なぜ小学校を主とするかについては、義務教育段階の学校教育にこそ、より重要とされた教育的意義が明確に出ているのではないかと思われるからである。義務教育段階を考察の対象にするのであれば、中学校も考察するべきだが、戦前の中学校は全く異質のものであるので、誤解を防ぐために小学校中心とした。したがって、現在の中学校にも言及するが、その特色を明確にするためにも、現在の中学校に当てはまる戦前の小学校高等科にも言及する必要があると考えている。高等科は義務教育でなかったが、高等科も考察する意味もあって小学校中心とした。以上の理由によって、この小論では、戦前の高等科を含む小学校と、戦後の小・中学校を考察の対象にする予

定である。

ところで、古くから山は心霊が宿り、人間の靈魂を再生させるにふさわしい場所だと考えられてきた。そのため、大人になるための試練として若者に登山をさせる風習が全国にあった。特に修験道の修行場となってきた霊山で盛んに行われてきた。立山をはじめ、青森の岩木山、山形の月山・羽黒山・湯殿山、奈良の大峰山などが知られている。このような成人儀礼としての登山は、村の行事として行われることが多く、近代化が進んで村社会が崩壊するにつれて行われなくなる傾向にある。

しかし、明治以降、近代学校制度が整備されると、富山県では、学校が主体となって立山登山を行うようになってきた。学校登山が盛んとなるのは、日本全体が登山ブームとなる大正期である。小学校の立山登山が普及するのもその頃からである。教員たちは、立山登山に対して、今までの成人儀礼登山とは違う教育的意義を見いだして、率先して児童を立山へ連れて行ったと思われる。交通や設備や装備などあらゆる面で悪条件であったにもかかわらず、教員たちは何故、立山登山を行おうとしたのか、また児童や保護者の思いはどうだったのであろうか。

論の進め方としては、最初に、学校登山開始以前の年少者の立山登山の事例を確認した後、明治末期の最初の学校登山、大正末期から昭和前期にかけての学校登山、太平洋戦争後の学校登山、の三つの時期に分けてそれぞれの特徴を考察したいと考えている。

なお、資料に使われている旧字体については、読者の便宜をはかるため、新字体に書き改めている。

*富山県[立山博物館]

1 小学校登山の開始以前

学校登山が行われるようになる以前は、何歳頃から立山に登っていたのだろうか。『富山県史民俗編』では「越中の若者でも呉東を中心として、早くは十五才の若者入り、おそくとも十八才の名替（元服）までに立山参拝をすべきであるという一つの通過儀礼が成立していた。」として何人かの証言を紹介している²⁾。

一方、大正時代に出版された書物の中には「此の崇高秀靈なる山気に触れて剛健の氣象を養成するにあらざれば男子たる能はずとして十三歳に至れば必ず同山に登り雄山の神に詣るべき慣習今日に至るまで現存せり」と書いてあるものもある³⁾。大正時代に、実際にどの範囲でそういう慣習があったか分からないが、13歳で登るべきだという意見があったことは注意しなければならない。

そのほか、元治元年（1864）に、満11歳と14歳の兄弟が立山登山をした記録がある⁴⁾。

また、最初の立山案内書ともいわれる『立山権現』を著した浅地倫は、明治34年に立山登山をした際に少年の集団に出会い、「立山参詣の壮者数人あり其齡十一二歳より十七八歳までにして孰れも白衣にて浄装し菅笠に立山参詣の四文字を墨黒々と記し」て

いたと記している⁵⁾。

明治41年に、立山の総合的研究書として最初出版物とされる『立山案内』を著した大井冷光は、その著書の中で、「絶頂にて十三歳の少女の登り得たるを目撃したり」と記している⁶⁾。また、大井は、明治42年に、富山日報社の派遣員として一夏、立山室堂に滞在し、山からの便りを『天の一方より』と題して紙上に連載したが、その中で、下新川郡前澤村の12、3才の少年が接待所に現れたとか、富山少年土曜会の登山隊一行30名がやって来たと言っている⁷⁾。

このような事例から、交通手段がほとんど徒歩しかない時代に、10代前半で登る者がいたことが分かる。しかし、体力的には可能でも、それだけでは学校教育の一環として立山登山が取り入れられることにはならない。学校教育として行われるには、教員側から教育的意義が示され、児童や保護者が理解し協力しなければ目的が達成されないからである。

どのような教育的意義を唱えて立山登山が行われるようになったのかを、社会的背景を含めて考えてみたい。

2 小学校における最初の立山登山

2.1 登山の内容

小学校登山の始まりは、明治45年の東水橋尋常高等小学校（現富山市立水橋中部小学校）といわれている⁸⁾。東水橋尋常高等小学校の『沿革史』には、明治45年の欄に「七月二十五日、立山登山隊ノ組織成リテ学校ヲ出発シ、同月二十九日無事帰校セリ其ノ人員ハ高等補習科高等科一二学年生並ニ卒業生合計六十二名ナリ 引率職員ハ金森、土肥、常川、山崎、堀田ノ五名ナリ」と簡単に記されている（写真1、2）。このほかに当時の記録は見あたらない。

後年、北日本新聞が、引率者の1人であった堀田竹二や当時の児童へのインタビューを交えて記事にしている。記事は昭和31年と昭和41年のものであり、かなり年月が経ってからのインタビューであることもあって、記事の中には沿革史の内容と違う記述が見られる。しかし、日程や経費の細かい点については記憶が薄れることも充分考えられるが、印象的な感想については記憶違いは少ないのではないと思われる。日程については、沿革史の記述通り4泊5日として、当時の標準的な登山日程と大きくは違わ

ないと考えるならば、1泊目は芦峯寺泊、2日目は獅子が鼻を通過して室堂泊、3日目に頂上に達したが宿泊場所は不明（室堂か？）、4日目は立山温泉で疲れを休め、5日目に全員無事で帰郷した、ということになるのではないだろうか。中語（ガイド）を雇って案内させ、荷物全部をかついでもらったというのは事実であろう。また、悪天候で大変だったらしく、当時参加した1人は、「笠やゴザは途中で吹っ飛び、とても寒く、こんなつらい山へ二度と来たくないと思った」と語っているが、これも事実と考えていいのではないだろうか。その他、帰ったときには多くの人が出迎え、盛大に祝ったとか、保護者も10名付き添った、と記されている。

ところで、どういう経緯で行われたのか詳細は述べられていないが、「そのころ先生は若さにあふれ、冒険性に富んでいた。そこで、“男なら立山へ行こう”と辻勝治校長の許しをうけ、生徒に呼びかけたという。父兄は賛否両論『まだ早い。金がかかる』と結局、三分の一の生徒が参加した。」という¹⁰⁾。これによれば、教員側からの積極的な働きかけで行われたことと、保護者の三分の二は否定的反応を示したことが分かる¹¹⁾。

当時はすでに宿泊を伴う修学旅行が普及していたが、1泊が多く、しかも経費がかかるので参加者は少ないのが普通であった。そういう時代に、4泊5日というのは極めて異例である。しかも困難が予想される登山であるから、教員の負担は大変であったであろう。この行事がその後継続して行われた形跡はない。最初から1回限りとして行われたのか、それとも予想以上に困難が多くて継続できなかったのかは不明である。それは今後の課題として、この異例ともいえる立山登山が、何故、この時期に水橋で行われたのであろうか、その理由を考えてみたい。

2.2 明治期の学校行事の特色

まず、この当時の学校行事の一般的な特色を押さえておきたい。明治期以来の富国強兵策は学校教育

にも導入され、軍人を理想像とする教育が行われた。日清・日露の二つの戦争を契機に国家意識が高揚し、軍部の発言力は一段と高まっていったが、学校も例外ではなかった。学校儀式の中に、皇室関係や軍事関係のものが多く取り入れられただけでなく、修学旅行で軍艦や陸軍演習を見学する場合も多かった¹²⁾。

また、強健な身体を育成することが求められ、遠足で長距離を歩くのが当たり前であった。東水橋尋常高等小学校の例では、明治40年に、高等科の児童が学校から呉羽山に登っている。往復8里の道のりを、徒歩で全員踏破した¹³⁾。遠足は、学校からの歩行が原則で費用がかからないこともあって、殆ど全員が参加する行事であった。

このような学校行事の中で、立山登山はどのような位置づけになるだろうか。宿泊を伴う一部の児童による活動という面から見て、修学旅行の一種といえよう。しかし、内容的には遠足または行軍といえよう。悪天候のためもあるが、参加した児童は二度と来たくないと言っていることから分かるように、楽しむよりも鍛錬を目的にしていたと考えられる。強健な身体と忍耐力を育成する目的としては、立山登山ほど厳しいものはなかったであろう。それだけに、登山を成し遂げた児童は、最も理想的な素質を持つ児童として称賛されたことであろう。

また、教員の中には登山に親しむ者が多かったと思われる。森有礼文部大臣は普通教育およびその要めである師範教育の目的として、「忠君愛国ノ氣」と順良・信愛・威重の「氣質」の養成を最重要視し、その具体的方法として「教室外の教育」に着目し、さらにその観点から学校行事を積極的に組織することに努めた。明治25年には尋常師範学校制度が改革され、その『学科及其程度』の説明中において、「夏季休業中及学期末休業等成ルヘク適當ノ時期ヲ撰ビ教員ヲシテ生徒ヲ率ヒテ修学旅行ヲナサシメ山川郊野ヲ跋涉シテ其身体及精神ヲ鍛錬スルト共ニ知見ヲ広メシメンコトニ務ムヘシ」とされた。すなわ

ち、夏休みなどの休業を利用して、山などの大自然の中を歩いて身体と精神を鍛錬するとともに、知見を広めることが求められたのである。

こうして、師範学校で山に親しんで教員となった者の中に、率先して生徒を山に連れて行きたいと思う者が出て不思議ではないだろう。山に恵まれた富山師範学校にも山好きな者が多くいたであろう¹³⁾。しかし、当時の東水橋尋常高等小学校で引率した教員の中に、山好きな者がいたかどうかは不明であり、今後の課題である。

2.3 参加した児童たちの置かれていた状況

参加したのは高等科の児童の一部であったが、どのような児童が参加したのであろうか。まず、当時の高等科とはどのような存在だったのであろうか。大正元年度末（明治45年度末でもある）における本県小学校の設置状況は次のようであった。

尋常小学校	327校
尋常高等小学校	75校
高等小学校	5校 ¹⁴⁾

児童数で見ても、高等科に進学したのは尋常小学校卒業生の三分の一未満であったと考えられる¹⁵⁾。明治41年から義務教育年限が6年になってしばらくの間、高等科は、「上級学校に進学しえないが義務教育だけでは満足しえない大衆上層の児童のための完結教育の場という性格をもつようになった」¹⁶⁾といわれるが、富山県でも、この時期はまだ高等科への進学率が低く、高等科は経済的に余裕のある家庭の子供が行く所だという意識が強かったと思われる。

その上、水橋尋常高等小学校で立山登山に参加したのは、高等補習科高等科の三分の一だといわれているので、高等科の中でもさらに余裕があり、教育に理解のある家庭の子供であったと考えられる。保護者が10人ついて行ったという点を見ても、保護者

の積極的協力があったといつてよい。

それにしても何故、水橋なのであろうか。水橋地域は、町の中を立山を源流とする常願寺川が流れ、当時は行政上も立山を含む中新川郡に属して、昔から立山とはつながりが深かった。その中でも「富山市に近い関係上、郡内で教育が一番早く開けた所である。したがって教育に対する理解があつて教育尊重の美風がある」¹⁷⁾といわれていた。

また県内でも有数の売薬地域であったことが関係しているかもしれない。富山売薬は江戸時代以来、富山を代表する産業として発展してきた。しかし、明治新政府が西洋医学への転換と洋薬の採用を打ち出したため、富山売薬は一大危機に直面した。その対策として、売薬業の改良と薬剤師の養成を目指して、売薬業者らの寄付金によって薬学校が設立されたが、その学校経営は困難を極めた。その後、薬業界の懸命の努力によって県立へと移管され、明治43年4月富山県立薬学専門学校となって、ようやく充実した薬学教育が可能となった。この学校の入学資格は高等小学校2か年課程卒業者もしくはこれと同等の学力を有するものとされた。卒業生には無試験で薬剤師の免状が与えられることになったので、入学希望者が多くなり、「入学生の半数以上が県外人で占められる」¹⁸⁾ほど入学が難しい学校となった。そのため、水橋地区の売薬業者達のなかには、子弟が東水橋尋常高等小学校の高等科を出て、薬学専門学校に入学してほしいと願う者が多くいたであろうと思われる。厳しい入学試験の難関を突破するためにも、強い精神力を身につけてほしいと考えたことだろう。このように考える保護者は、立山登山の計画があれば、我が子を参加させても不思議ではないだろう¹⁹⁾。

いずれにしろ、この登山は、水橋という立山にゆかりのある地域で、小学生の快挙を成し遂げたいと願う若くて冒険心に富む教員集団と、ある程度経済力があり、売薬という特殊な背景を抱えて教育に高い関心をもつ保護者の思いが一致したことによって実

現された特殊な事例であって、まだ小学校で立山登

山が普及する状況ではなかったといえよう。

3 大正末期から昭和前期における小学校の立山登山

大正10年代になると、富山市の中心地域の小学校で立山登山が実施されるようになった。早い例として、八人町尋常高等小学校（現富山市立八人町小学校）が大正11年から、星井町尋常高等小学校（現富山市立星井町小学校）が大正13年から実施した。この2校については、当時の新聞記事等を含めて資料があるので、この2校の事例を通して、大正期から昭和前期にかけての小学校の立山登山の特色を考えてみたい。

この時期には交通機関も整備されはじめた。富山県営鉄道が大正10年4月に南富山・上滝間、同年8月には岩嶺寺まで開通し、大正12年4月には千垣まで開通した。これによって、富山市内からの立山登山の日程が、1日以上短縮されることになった。体力面で心配な小学生にとって、1日の短縮は大きい。この交通の発達も、富山市内の小学校の立山登山を促す重要な要因になったと考えられる。しかし、それだけでは、教員たちに負担の大きい立山登山を行わせる動機にはならなかったのではないだろうか。もっと積極的な動機、すなわち立山登山の教育的意義への確信があったのではないかと思われるのである。その点を明らかにしてみたい。

3.1 八人町尋常高等小学校の立山登山

八人町尋常高等小学校は、大正時代の長い間、富山市で唯一の男子高等科を併置している小学校であった。大正12年4月に創校50周年を迎えたが、それを記念して、『創校五十周年記念雑誌』を発行している。その中で、立山登山について、「艱苦に耐え欠乏と戦ひ立嶽の険を跋涉し身体を鍛錬し剛健なる精神を養ひ絶大崇高の山気に接しては活然の氣象を養ふため、高等科生徒の希望者に対し厳密なる校医の身体検査を施し、参拾名内外を一団とし、数名の

本校職員付添ひ往復数日間の予定を以て登山す」と記している。

また、別の所で、「北陸の天地は曇天多く殊に冬季は積雪に塞され三方連山に囲まれて此所に住む人恰も洞中の人の如く意気振はず」と、富山県人の閉鎖性・保守性を問題にした上で、「高山に登りて天地の四方に眼を放てば宇宙の廣大無限なるに想到すべし。此に於いてか吾人の井中の蛙的大志望は黒子大と化し決して之に満足すべからざるを知る」と述べている。すなわち、立山登山によって閉鎖性・保守性を打破し、立身出世をめざすようになってほしいと考えていたことが分かる。立身出世は当時の支配的思想であったが、登山はその思想を伝えるのに最適と見られていたのであろう。

また、最後のところで、「時は大正十一年八月心ある人殊に当校々長辻尚村氏によって登山隊を組織すべく唱導せられ之に共鳴するもの頗る多く参加申込殺到せり。然れども悉くの希望容るる能はずして余儀なく第一回立山登山隊の一行の員数を五十名と決した。」と記してあることから、これが最初の立山登山であることと、希望者が多かったことをうかがわせる。

このように、この立山登山は創校50周年を記念して行われたようだが、校長のリーダーシップが大きなきっかけになったと思われる。校長の辻尚村は、この時期ある雑誌の中で、「余は本務以外に読書と山登りと文章と三つの道楽の外には殆んど趣味のない男であるが近時は此の三つの道楽は三つとも大層遠ざかる様になったせい何か何だか自分が小さくなる様に考へる様になった何とか此の三趣味の復興に努力したいと力めて居る」²⁰⁾と書いており、登山を趣味としていたことが分かる。

じつは、辻尚村は、近代登山の先駆者的存在とし

て知られる小杉復堂²⁴⁾の門下生で、小杉と同じく漢学を専門とし、小杉の追悼会を計画した中心人物でもある²⁵⁾。小杉から感化を受けて、登山を趣味とするようになったことも充分考えられる。

また、辻は、大井冷光と面識があった。大井は、明治末期から大正期にかけて、立山開山の佐伯有頼の童話を書いたりして、子供達の立山登山を奨励した人物である。その大井の文章の中に、辻のことが記されているものがある。それによれば、辻は、大正4年に、五番町児童談話会の会長をしていて、大井を談話会の会合に招いている。大井は、以前からこの会と関係があって、「現会長辻尚村先生からのお招きで第七十一回目の会合に出席したが、さすがに懐旧の情のせまって談話もいつかむすぼれがちであった」と記している²⁶⁾。辻は、大井と面識があったことから、子供の立山登山に思い入れがあった可能性が考えられる。

また、児童談話会の会長をしていたことから推察できるように、辻は地域の教育活動も熱心に行う人物であった。大正15年には、『辻尚村先生彰徳会』が組織され、会員七百五十余名から資金を集めて、富山市呉羽山公園頂上に胸像が建てられた²⁷⁾。このことから、辻は、高潔清廉な人格者として多くの人々から敬慕されていたことが分かる。このような人物であった辻の教育方針は、強い信頼感に基づいて受け入れられたことであろう。

ところで、第1回目の立山登山の詳細は不明であるが、『創校五十周年記念雑誌』には次のような記述が見られる。横江まで鉄道を利用した後、「下車するや先に編成せる第一分隊長竹村園吉氏、第二分隊長清水市正氏、第三分隊長山田松太郎氏、会計係長前川儀政氏、警衛係並木清蔵氏、新田権十郎氏、高橋武郎氏は予定の如く一糸乱れず隊形を整へ堂々健脚を誇りつつ一歩一歩立岳に近づく。」教職員を分隊長にして、まるで模範的な軍隊の行軍のようである。ここに、この立山登山の本質の一端があらわれているのではないだろうか。この当時はたくまし

い軍人が理想像であったが、この立山登山に参加した児童は、理想的な児童像を演じているといえよう。しかし、この当時の立山登山には他にも特色があったことを見逃してはいけないだろう。

八人町小学校の立山登山は学校行事として継続された。また、当時は社会的にも注目されていたようで、毎年のように新聞で紹介された。その記事から内容を見ていくことにする。大正13年には、校下青年団も含め52名が、4人の男性教員と1名の女性教員に引率されて立山登山を行った。この時、児童の能力や体力や経済事情などを考慮して、他に臨海教育や呉羽山での林間学校など多彩なプログラムも用意されていたことが注目される²⁸⁾。体力の弱い児童には、臨海教育や林間学校が計画され、健脚の児童には立山登山が計画されていたのである。立山登山だけが特別に行われていたわけではない²⁹⁾。また、女性教員が引率者に加わっていたことも注目される(写真3)。

大正14年には、26名の児童が3人の男性教員と1名の女性教員に引率され、7月21日から3泊4日の日程で立山登山を行った。千垣駅まで鉄道を利用し、八郎坂を登って弘法茶屋で1泊目、暴風雨に苦しみながら室堂で2泊目、依然暴風雨の中を雄山登頂を果たして立山温泉で3泊目、翌日夕方、全員が無事に帰宅した。その際頂上で、両陛下摂政宮同妃殿下の万歳を三唱した³⁰⁾。

大正15年には、尋常6年および男女高等科生約50名に、3人の男性教員と2人の女性教員が引率して行うことになった。また、雄山から別山まで縦走する計画となった。尋常6年や女の高等科児童を加えたり、縦走を企てたりなど、計画が進展していたことが注目される³¹⁾。この年は悪天候が続いたので、実際にこの通り実施されたかどうかは不明である。

その後数年は不明であるが、昭和4年に、児童20名が2人の教員に引率されて立山登山を行っている³²⁾。



写真2 明治45年7月25日の立山登山を記した記録。
(東水橋尋常高等小学校沿革史第3号)



写真1 東水橋尋常高等小学校の沿革史第3号。
(明治45年の立山登山を記している)



写真4 星井町小学校の立山登山を報じた記事。
(大正13年7月27日付、富山新報)



写真3 八人町小学校の立山登山を報じた記事
(大正13年7月21日付、富山新報)



写真6 小学生の立山登山に疑問を投げかけた記事。
(昭和36年7月19日付、北日本新聞)



写真5 富山市長の立山視察談を報じた記事
(昭和6年7月29日付、富山新報)

3.2 星井町尋常高等小学校の立山登山

星井町尋常高等小学校は、大正13年から立山登山を行うようになった。立山登山を行うようになった経緯は不明である。しかし、この年から男子の高等科が設置されていて、富山市内で同じく男子高等科をもっている八人町小学校ですで行われていたことが影響しているのではないだろうか³⁹⁾。

ところで、星井町小学校の立山登山の内容はどのようなものだったのだろうか。沿革史には大正13年7月20日の欄に「本日ヨリ四日間ノ予定ニテ職員四名児童拾四名立山登攀ヲナス」と記されている³⁹⁾。当時の新聞は、「星井町校生立山征服 女生徒も交って」という見出しで、引率した女性教員の談話も入れて記事にしている。それによれば、千垣駅で下車後、桑谷小屋で1泊目、雄山・浄土山を踏破して室堂で2泊目、五色ヶ原を廻って高山植物を研究して立山温泉で3泊目、4日目下山という日程であった。一の越から雄山頂上までランニング競争して、尋六の児童が第1着で女性教員が第3着だった。また、予定では3日目は松尾峠から立山温泉へ下ることにしていたが、一同は余りに元気旺盛であったので予定変更して五色ヶ原へ廻った³⁹⁾(写真4)。

この記事には注目すべき点が3つある。1点目は、高等科の男子児童が主ではあったが、尋常小学校の児童や女子にも登山をさせていたということである。この点では、八人町小学校よりも早い取り組みであったといえよう。2点目は、高山植物の観察に時間を取ったということである。科学教育の視点もあったということである。3点目は、元気が強調されていることである。登山の常識からすれば、一の越からのランニング競争は危険な行為として非難されるべきであろうが、元気を示すことが重要だとされたということである。元気が余っていたから五色ヶ原まで足を伸ばしたというが、これも簡単なことではない。これらは、健脚を証明することがこの登山の主目的だったことを示しているのではないだろうか。

大正14年も同じ日程で行われたが、人数は30名となっている³⁹⁾。大正15年には、40余名の児童が4日間の日程で立山登山を行った。当時の新聞は、「本年11歳の少年」、すなわち尋常5年の児童も参加したと記している。また、引率教員の談話として、「三の越では石工教名が目下熱心に東宮殿下御歌標建設に努力していた。われわれ一行はこの御歌標の前で声高らかに山の靈氣をあびながら自啓歌を高くさげんだ」と記している³⁹⁾。「東宮殿下御歌標」とは、大正14年1月の歌会始に、皇太子（後の昭和天皇）が、「たて山のそらに聳ゆるを、しさにならへとぞ思ふみよのすがたも」と詠んだことを記念して、富山県が立山に作った歌標柱のことである。この歌は、皇太子が陸軍大演習統監のため前年に来県した際、立山の景観に感嘆して詠んだといわれている。星井町小学校の児童たちは、その建設途中の現場に出会ったのである。また、自啓歌とは、星井町小学校で制定された歌だと思われるが³⁹⁾、歌標柱の前で歌っていることに注意する必要がある。この当時は忠君愛国が教育の基本であったが、この児童たちは、天皇に対して、星井町小学校の模範生を演じたのである。これが、翌年になると、もっと鮮明になってくる。

昭和2年のときには、今までと同じ日程で50余名が参加した。当時の新聞は、引率教員の談話として、「三の越で御歌標柱の直前で敬礼をなして雄山のテッペンで『たて山の…』の御歌を大橋訓導の音頭で声高らかに謹唱した時ほど崇高な觀念に打たれ、且つ愉快なことはなかった。立山の御歌を頂上で五十幾名の団体が高唱したのは恐らく私共を以て最初でありました」と書いている³⁹⁾。つまり、立山は、昭和2年に天皇の歌標柱が設置されることによって、天皇への忠誠を示す格好の場所となったのである。

3.3 2つの学校登山の共通点

どちらの学校も、富山市の中心地域の高等科を有する小学校である。何故、そういう小学校で、立山

登山が行われたのかを考えてみたい。まず、どちらも最初は主に高等科の男子を対象としていたが、当時の富山市内での高等科はどのような存在だったのであろうか。当時、高等科進学志願者は増加しつつあったが、富山県の取り組みは遅れていた。尋常小学校に高等科を併置することが進められたが、大正12年度末の富山県における高等科の併置状況は次のようであった。

高等科併置率 全国平均 89.94%

高等科併置率 富山県 35.48%

このように、「本県における高等科の併置状況は、全国的に見ると決して優位ではなく、むしろ最劣位に位置していた」³⁹⁾。つまり、高等科は、全国的には中等学校へ進学できない大多数の子供が行く所になりつつあったが、富山県ではまだ、希望者の一部しか入学できず、どちらかといえば裕福な家庭の子弟しか行けない所であった。そして、当時の中等学校への入学はもっと狭き門であった。

このころの高等科の児童について、当時の星井町小学校校長の菊盛永造は、次のように述べている。「尚高等科入学児童は一般に成績が余り思わしくない、之れは私の学校のみならず、全国同一の傾向であらうと思ふ。それと云ふのは、尋常科卒業生の優等生は大方中等学校に進み、其落伍者か然らざれば、多く中以下の成績のもの集りでありますから、当然成績の良くないと云ふことであらうと思ひます…」⁴⁰⁾。すなわち、このころの富山市の高等科は、中等学校に進学できないが、義務教育だけでは満足できない大衆上層の児童が進学するところであった。中には、大きな挫折感を抱いている児童もいた。そのため、高等科では、いかに児童の意欲を高めるか、立身出世の夢を持たせるか、が大きな課題だったのである。特に、中等学校を有する都市部の高等科ほど、そういう傾向があったと思われる。

教育学者の広田照幸氏は、その著書『日本人のしつけは衰退したか』の中で、昭和初期まで、「農村でも都市でも、多くの親たちはしつけや家庭教育に

必ずしも十分な注意を払っていなかった。村では、しつけや人間形成のさまざまな機会は、近隣や親族・若者組など大きなネットワークに拡散的に埋め込まれていた。都市でも、下層から庶民層にいたる広い層で、家族という単位自体が不安定で流動的であったし、経済的・時間的余裕の少ない親にとって、子供のことはなおざりにされがちであった。」⁴¹⁾とし、大正期になって都市に住む富裕で教養のある新興勢力、すなわち専門職や官吏・俸給生活者などの新中間層の親の間で、教育への関心が高まってきたと述べている⁴²⁾。この説に従えば、富山県の中では、まず富山市内で教育への関心が高まったと考えられる。

大正期になって全国的に教育への関心が高まったが、特に富山県では、大正新教育運動が積極的に展開され、さまざまな教育実践が精力的に試みられた。そういう中で、都市部の高等科の教員達が、希望や目標を失いかけた児童の意欲を今一度奮い立たせようとして計画したのが立山登山であったのではないだろうか。浩然の気を養い精神を鍛錬するとともに、当時理想とされた軍人の資質である「たくましき」をも身につけてほしいと考えたのではないだろうか。

大正期以降、たくましい身体と健全な精神を育成するためとして、スポーツが盛んに奨励された。1913（大正2）年、文部省は、初めて『学校体操教授要目』を公布し、学校体育の方向を具体的に示した。その中で遊技としてバスケットボールやフットボール等が採用され、体育教材の中にスポーツの要素が導入されるとともに、正課外に奨励すべき遊技として、水泳・ローンテニス・ベースボール・角力などと並んで登山が加えられた。このことと当時の登山ブームが相まって、中・高等学校の生徒の間に登山が広まった。中等学校と同年齢の児童を教育する小学校高等科の教員の中には、高等科の児童にも登山を経験させたいと思う者もいたであろう。

しかし当時は、一般大衆の教育とエリート養成の

教育が全く切り離された複線型の教育制度であった。小学校と中・高等学校では教育方針も違っていた。小学校では、忠君愛国の道徳教育が優先されたが、登山においてもその教育方針が反映された。この時期の小学校登山は、スポーツとしての楽しみの側面や、高山植物の観察に見られるような科学教育の側面や、立身出世を教える場でもあったが、忠君愛国思想を教える場でもあった。特に、皇太子（のちの昭和天皇）が『立山の御歌』を詠んだ頃から、いっそう軍国主義化が進み天皇への忠誠が叫ばれるようになったこともあって、立山は天皇への忠誠を示す格好の場所となった¹¹⁾。立山登山をする児童は、忠君愛国を実践する理想的な児童として見られるようになったと考えられる。

3.4 その後の小学校登山

昭和初期になると、富山地区を始め、いくつかの小学校でも立山登山を行うようになった。四方尋常高等小学校（現富山市立四方小学校）では、昭和3年に身体強健なる高学年の男子数名が、青年団員十余名とともに4人の教員に引率されて、3泊4日で立山登山を行った。1日目は弘法小屋泊、2日目に獅子が鼻を経由して雄山・別山を登って室堂泊、3日目は五色ガ原を通過して立山温泉泊、4日目に帰校している。以後数年継続された¹²⁾。西田地方尋常高等小学校（現富山市立西田地方小学校）では、昭和5年に、尋6・高1の男子児童の有志が6名の教員引率の下に立山登山を行った¹³⁾。西田地方小学校の場合は、昭和4年秋から高等科を設置したことがきっかけになったと思われる。また、五番町尋常高等小学校（現富山市立五番町小学校）が昭和6年に、中新川郡音杉尋常高等小学校が昭和7年に、それぞれ立山登山を行っている¹⁴⁾。

その後しばらくおいて、富山師範付属国民学校（現富山大学教育学部附属小学校）で、国民学校の時代に、初6と高2の児童が立山登山を行っている¹⁵⁾。水橋西部国民学校（現富山市立水橋西部小学校）

では、昭和17年から高等科2年男女の希望者で、男女別に立山登山を行った¹⁶⁾。高野国民学校（現立山町立高野小学校）では、昭和17年に高等科1年が学校田収益金で立山登山を行っている¹⁷⁾。このように、昭和17年にいくつかの例が見られる。その理由としては、太平洋戦争が始まって山頂の雄山神社に戦勝祈願をする事例があったことや、勤労奉仕による収益金があったことや、「健民運動夏季心身鍛練実施要項」「国民学校体練科教授要項改正」などに見られるように心身体力の錬成向上に関する示達が出された¹⁸⁾ ことが関係していると考えられる。

3.5 この時期の小学校登山の進展を阻んだもの

この時期の小学校登山は、実施校も少なく、実施している学校でも参加者は極めて少なかった。その主な理由としては、費用がかかったことと、危険が大きかったことが考えられるだろう。しかし、昭和初期には、卒業記念をかねて費用を長期にわたって積み立てて、伊勢神宮への参宮旅行を行う小学校が多かったことを考えると、費用の問題よりも危険性の問題の方が大きかったと思われる。実施する小学校ではいずれも、厳格な健康診断を実施して、身体強健な者を少数だけ選んでいるが、これは少しでも危険を回避しようとしたことだろう。

では、実際に、どのような危険性があったのだろうか、その1例を紹介したい。昭和6年7月、富山市長が立山を視察した際に小学生の一行に出会ったが、そのときの市長の感想が当時の新聞に出ている。その中で市長は、市内の小学生15名と2名の引率教員が、山小屋が満員のため宿泊を拒否されようとしていたので、自分が交渉に入って難を逃れたという。子供の中には寒気のため震えていた者がいたという。市長は、小学生の立山登山は暴挙だと非難し、称名滝までの日帰り程度にすべきだと主張している¹⁹⁾（写真5）。

このころは、立山への登山者が急増し、山小屋が満員になることもしばしばであった。山小屋に入る

ことができても、横になることもできないこともあった。これでは、体の疲れも取れず、大変危険だったのであろう。昭和5年8月の新聞には、近年、県外登山者は激増しているのに県内登山者は激減していると記されている。その原因を、事情通の説として、宿泊料が高いことと宿泊所の不愉快を痛感しているからだとしている³⁰⁾。この当時、立山では宿泊所の

問題が深刻だったことが分かる。

この時期は、ガイドを雇ったであろうから、緊急時の対応は何とかできたであろうが、宿泊所の不足は、学校登山に危険をもたらす最も大きな問題であったのではないだろうか。宿泊場所が充分確保できないこともあって、規模を小さくして実施せざるを得なかったのであろう。

4 太平洋戦争後の立山登山

太平洋戦争後、義務教育年限が9年間となり、小学校の6年間と中学校の3年間の、いわゆる六三制となった。高等科に行くべき年齢の子供は、新制中学校に行くことになった。そういうこともあって、立山登山は、新制小学校で行われるところもあれば新制中学校で行われるところも出てきた。太平洋戦争後の早い時期から、小・中学校で立山登山を行うようになったが、交通機関や宿泊施設の整備に伴って、その内容は大きく変わっていった。そのためこの後は、昭和20年代、昭和30年代、昭和40年代以降に区切って、その変遷を見ていくことにする。

4.1 昭和20年代

昭和20年代の早い例として、まだ新教育体制になる前の昭和21年に、立山登山を行った小学校がある。水橋中部国民学校、立山登山を最初に実施した東水橋尋常高等小学校の後身である。『沿革史』に、「七月二十一日～二十三日 立山登山六年男子」とだけ書かれている。この年から校長が堀田竹二になっているが、この人物は明治45年の登山のときに引率教員であった1人である。なつかしの小学校の校長となり、敗戦で意気消沈している子供たちを元気づけたいと思ったのであろうか。明治45年のときとの違いは、日程が短くなっていることと、6年男子となっていることである。また、この後継続して行われた様子はない。同校が立山登山を継続して行うようになるのは、昭和33年からである³¹⁾。

昭和24年7月には、富山市立愛宕小学校が、特別に希望者を募って立山登山を行った。6年生の保護者が主体となり、参加児童は男子11名・女子4名で、職員6名が同行した。粟栗野駅から歩き、1日目は八丁坂を経由して天狗で宿泊、2日目は雄山と地獄谷を巡って天狗で宿泊、3日目は天狗から八丁坂を経由して帰校している。登山の準備として、呉羽山まで毎日、歩行訓練を続けたという。その後、低地の林間学校を継続し、立山登山を中断していたが、昭和36年から林間学校をやめて立山登山に切り替えた³²⁾。この例では、保護者が登山中のリーダーとなっていることが注目される。登山に熟練した保護者がいたために計画されたのであろう。その後、リーダーとなる人物がいなかったために継続されなかったのだろう。

この2つの事例からも分かるように、この時期に立山登山を行う小学校はあった。しかし、粟栗野からの徒歩のために大変な体力を要したことと、まだ戦後まもなくで経済的に苦しく費用を出せる家庭も少なかったこともあって、実施した学校は少なく、しかも実施したとしても極めて少数の児童しか参加できなかったようである。また、歩くルートが長いため、登山に熟練している引率者がいないと実施できなかったようである。

また、中学校の例としては、まず、富山大学付属中学校が、遅くとも昭和27年から昭和31年の間、2年生を対象にして立山登山を行った³³⁾。同校で、引

率教員の中心として活躍したのが、水井謹作である。水井は、夏の立山及び剣岳登山で10回以上生徒を引率して、1人も落伍者を出さなかった登山のベテランであったが、某雑誌でその体験談を記している。昭和28年には、約90名の中学2年の男女生徒を引率して、第1日目は地獄谷で宿泊、第2日目は雄山から縦走して別山乗越で宿泊、最終日は大日尾根廻りで帰校したという。また、昭和27年の集団登山で悪天候に見舞われた苦勞話も記している。ところで、その雑誌で、生徒に登山を体験させる理由として、「私は英詩人ブレイクの『山を愛する人は人を愛する善人である』と云う言葉を今以て信じております」と記し、「山によって一歩一歩と慎重に磨かれて行き、鍛えられて行く体力と魂、けいけんな心と、美しく澄んでいく魂、努力のあとにあたえられる恵みと、それから生ずる愛情と生命に対する自信を若い世代に与えたいものです」と記している。そのため、水井は、引率者が「生徒に靴ずれを起こさしたり、帰宅後足腰がたたぬようにすることは、登山を苦痛と考えるように誘導していることとなります」として、きびしく戒めている⁵⁹⁾。ここには、以前の忠君愛国や鍛錬のための登山などとは全く違う、新しい登山思想が見られる。

富山市立芝園中学校も、昭和20年代の早い時期から立山登山を実施している。同校の藤堂良一は、昭和27年から昭和38年まで毎年夏に生徒を引率して立山登山を行った。藤堂は、同校の記念誌の中でその回想を記している。「登山の本当の苦しみと喜び、楽しみを味わせたい」と思って、ケーブルがついたあとも2、3年は八郎坂を登った。「例年落伍者が5、6名は出た。そこでいよいよ先生方の体力が試されたものである」と記していることから、教員たちは、そういう生徒を介助しながら登ったようである。地獄谷の小屋に泊まったときは、みんなで枯木や枯枝を拾ってきて、「キャンプファイヤーをやり歌声が二、三千米級の山々にこだまして大いに浩然の気を養い青春を謳歌した」という⁶⁰⁾。教員の負担

は大変だったろうが、教師自ら楽しんでいた様子が伝わってくる。

これらのように、この頃から立山登山を継続的に行う中学校があった。しかし、どちらの例でも、生徒の体調を保つことに苦勞しており、すぐれた引率者がいたから可能だったといえよう。中学生でさえこの様子なのだから、この時期の小学生の立山登山はもっと困難なものであったであろう。

4.2 昭和30年代

昭和30年代になって、急速に交通機関の整備が進んだ。まず、昭和29年に千寿が原と美女平間のケーブルカーが開通したのを先駆けとして、昭和30年には電鉄富山と千寿が原（現立山駅）間の直通が完成するとともに、美女平と弘法の間にバスが開通した。昭和33年の9月には、バスが弥陀ヶ原まで開通した。こうして、昭和33年秋には、弥陀ヶ原まで交通機関を利用して来ることができるようになって、立山主峰への日帰り登山も可能となり、登山の大衆化が急速に進んだ。

宿泊施設については、国民宿舎立山荘が、昭和33年8月20日から営業を開始した。この施設は、富山県PTAの寄付金と厚生年金融資で作られたもので、当初は280人余りの宿泊能力を持ち、県内の小・中・高校生は割安で宿泊できた。このように交通機関と宿泊施設が整備されたことによって、昭和34年以降、小・中学校の団体登山が急増した。

小学校では、6年生の宿泊学習が重要な行事として位置づけられていたが、昭和30年代半ばに大きな問題を抱えていた。というのは、昭和30年代半ばに6年生になる児童は戦後のベビーブームに生まれた子供たちで、どの学校でも6年生の児童数が多かった。そのため、宿泊場所を確保することが大変であった。それまで立山には多人数を宿泊できる施設が少なかったために、小学校の宿泊学習を行う場所としては適していないと考えられてきた。しかし、立山荘が完成したことによって、小学校の宿泊学習を

立山で行うことが容易となった（第1表）。

第1表 立山荘の7、8月予約状況
(昭和34年7月18日、北日本新聞記事より作成)

日時	学校及び人数
7. 19	射水郡浅井小学校100人
7. 21	射水郡大島小学校120人
7. 22	東砺波郡中田小学校103人・西砺波郡靉瀾小学校87人
7. 23	滑川市西加積小学校70人・高岡市牧野小学校100人
7. 24	富山市新庄小学校300人
7. 25	富山市新庄小学校300人
7. 26	富山市萩浦小学校230人
7. 27	富山市柳町小学校386人
7. 28	富山市奥田小学校300人
7. 29	富山市安野屋小学校200人
7. 30	上新川郡大久保小学校100人
7. 31	富山市堀川小学校380人
8. 1	富山市奥田中学校30人・富山市奥田小学校150人
8. 3	富山市西田地方小学校340人
8. 4	富山市西田地方小学校340人
8. 5	富山市奥田中学校71人・富山市山室小学校220人
8. 6	富山市蜷川小学校150人
8. 7	富山市五番町小学校150人
8. 10	富山市星井町小学校180人
8. 11	婦負郡速星小学校200人
8. 12	富山市八人町小学校262人
8. 17	射水郡小杉小学校50人
8. 19	中新川郡水橋中部小学校190人
8. 22	富山市大広田小学校150人
8. 27	富山市東部小学校315人

※上記の表は、県内の小中学校分だけを取りだして作成したものである。

小規模な小学校の中には、室堂や地獄谷付近の山小屋に宿泊して、雄山登頂を行う小学校もあった。例えば、城端小学校は昭和34年に第1回の立山登山を行ったが、1日目に地獄谷の雷鳥荘まで歩き、翌朝頂上を目指した。疲労度の激しい者数名は一の越に残した⁵⁴⁾。しかし、このような小学校は少なかった。

立山で宿泊学習を行う小学校の多くは立山荘を利用したが、大半は、林間学校と称して、弥陀ヶ原付近を散策したり、遠くても地獄谷や室堂平あたりまで往復するのがほとんどであった。立山荘のある弥陀ヶ原から雄山登頂を行うには、距離が長すぎた

からであろう。しかしそれだけでも、小学生には大変な感動を与えたようである。そういう小学校のひとつであった富山市立東部小学校の宮田正義は、某雑誌に手記を載せている。それによれば、1日目は、立山荘に到着後、美松荘によって昼食をとり、天狗平に向かう者と立山荘に帰る者に分かれて行動した。2日目は、旧噴火口（立山カルデラ）を見学した後、写生をして帰校した。その手記からは、児童たちが、天狗平からの浄土山の山容や弥陀ヶ原からの夕日と夜景に感動している様子や、楽しそうに写生している様子が伝わってくる⁵⁵⁾。

立山荘で宿泊学習を行う小学校の中には、少数ではあるが立山登山を行う小学校があった。その1つが、射水郡の大島小学校であった。同校では、昭和34年から6年生が立山登山を行うようになった。「当時、山に詳しい職員（泉田昭夫氏）の指導立案で、全職員あげて計画を練り上げた。登山の事前調査に『体力テスト』『健康診断』を行い個人のカルテを作った。グラウンドでトラックの10周できる体力があるか、階段の昇降をくり返して脈拍異常が起らないか、主に体力と心臓異常をみることに、校医の内診をもとにして、グループ作り、コース決定をした」。このように、「児童の能力差、男女差を考え、健康第一の柔軟な計画を実施」した。1日目は、立山荘に着いてから、付近で自然観察をするグループと地獄谷を見学するグループに分かれて行動した。2日目は、A班（男子のうちで健康で脚力のある者で編成）は、雄山登頂を果たした。B班（A班に入らぬ男子と女子のうち身体強健な者）は、一の越までを往復した。C班（B班の女子以外の女子と男子で病弱や病気の者）は地獄谷までを往復した。

この行事が、昭和36年に大きな事件となった。この年の登頂日程は、第1日目に晴天ならば、その日のうちに登頂することになっていた。（前の年は、第1日目が晴天だったにもかかわらず、登頂を第2日目に予定していて、雨のため登頂できず、子供たちも大変残念がったので、今年は何とか登頂させた

いと願って、このような日程にしたということである。)夜の8時過ぎに、「弱い子供約30名を宿舎に残し、残り全員、無事登頂を終えて、午後6時宿舎に着いた」との連絡があったが、翌朝の北日本新聞に、「小学生としては無理な登山計画である」との批判記事が掲載された(写真6)。記事に誤りがあったため、新聞社側が謝罪して終わっただけだが、小学生の立山登山のあり方に問題を投げかけた事例といえよう。

このように、この時期の小学校登山の特色としては、林間学校として立山に来る小学校は増えたが、内容は弥陀ヶ原や地獄谷・室堂平などを散策することが多く、登頂を目指す小学校はまだ少なかったと

いえる。そして、登頂を目指す小学校では、早い時期からの体力づくりなど、万全を期してかなり用意周到な準備をしているが、それも有意義な教育活動と考えて取り組んでいたことが分かる。

ところで、立山登山者の増加を反映して、北日本新聞では、昭和34年から毎年夏季、地獄谷の雷鳥荘に臨時通信部を設置して、立山の登山状況をほぼ毎日「立山だより」という欄を設けて紹介している。それを調べると、この時期は小学校だけでなく、多くの中学校や高校でも立山登山を行っていることが分かる。このことも、この時期の特色といえるだろう。そのなかで、昭和36年の「立山だより」で紹介された小中高校名を次に記しておく(第2表)。

第2表 昭和36年の北日本新聞「立山だより」欄で、登山をしたとして紹介された小中高校名一欄

	小学校	中学校	高校
7.16		般若中学校	
7.18	大島小学校	立山中学校、八尾中学校	
7.21		戸出中学校	雄山高校、井波高校
7.23	四方小学校	大久保中学校	富山女子高校
7.24	水橋町上条小学校	大久保中学校	桜井高校
7.25	西加積小学校	芝園中学校、山室中学校、高岡西部中学校	高岡女子高校
7.26		城山中学校、山室中学校、西加積中学校、岩瀬中学校、小杉中学校、滑川中学校	高岡高校、八尾高校、伏木高校、砺波高校
7.28		杉原中学校、上東中学校、野積中学校、白鷹中学校	私立富山女子高校、不二越高校
7.29	奥田小学校		
7.30		大門中学校	砺波高校
7.31	山室小学校	堀川中学校、三成中学校、五位中学校	
8. 1	堀川小学校	月岡中学校、大門中学校、大泉中学校、奥田中学校	高岡商業高校
8. 2	大広田小学校 針原小学校	奥田中学校	
8. 3	呉羽小学校	和合中学校	
8. 4		和合中学校、桜井中学校	砺波女子高校
8.10		伏木中学校	県富山女子高校
8.12	伏木古府小学校	福岡中学校	
8.13	蛭川小学校		
8.14	下関小学校		

※人数はほとんど不明である。高校では部活動としてきている学校もあると考えられる。

中学校では、山好きな教員が中心となって、希望者を募集して実施する機会が多かった。最初は少ない人数から始めて、しだいに大半の生徒が参加する行事に発展していった場合が多かった。例えば、高岡市立広陵中学校では、昭和30年代初頭には、全校生徒より30名から40名以内の希望者を募集して、健康診断で許可された生徒を対象に、立山登山を実施している⁵⁹⁾。高岡市立志貴野中学校の場合は、山好きな校長の発案で昭和38年から立山登山を実施するようになったが、1回目の参加者は46名だった。それが昭和43年には、2年生の6割に近い218名が参加するまでになったという⁶⁰⁾。

4.3 昭和40年代以降

昭和39年6月に美女平と室堂間の自動車道路が全線開通し、バスの運行が開始された。これによって、富山市から室堂まで、乗り物を乗り継いで3時間で到達できるようになり、日帰り登山が容易となった。

小学校の立山登山も増加し、室堂から立山を目指して歩くようになった。そして多くの児童が、立山登山を小学校生活で最も印象深い行事のひとつとして挙げ、卒業文集にその感想を書くようになった⁶¹⁾。その感想には、①自然体験の感動（自然の美しさ・雄大さ・厳しさなど）、②達成感・自分への自信獲得、③助け合いのすばらしさ・友情の深まり、④体力の向上（準備段階も含めて）⑤マナーの学習 ⑥郷土愛や環境への関心向上、などに関するものが多い。立山登山の目的が、児童にしっかり伝わっていることが分かる。

しかしやがて、立山登山を取りやめる学校が出てきた。特に、中学校や高校で、それが顕著に見られた。『富山市教育委員会五十年史』には、中学校の共同宿泊学習の変遷について、次のように記されている。「中学校においても、小学校同様、共同宿泊学習は長い間林間学校として、夏季休業中に行われていた。…昭和40年代に入り立山登山をする学校が減り、近隣の高原等へ行く傾向が増えた。…自然に

触れることを主眼とし、登山やハイキングが多かったが、時代を経るにしたがって、修学旅行の練習もかねて、途中で高山や金沢などで班別学習を行う学校が増えてきた。立山登山を日帰りとして一時的に復帰した学校も60年代に見られた」。

中学校で、立山登山を行わなくなった理由としては、2つ考えられる。まず1つは、夏休みに部活動での対外試合などの行事が多くなって、立山登山を行う余裕がなくなったことである。もう1つは、遠足や共同宿泊学習などの学校行事が、生徒が自ら企画して実施する方向へ動いていったことである。その結果、さまざまな教育活動に対応できる施設や観光地での宿泊学習が増えていった。現在では、中学校で立山登山を行っている学校はほとんどないということである。

小学校でも、立山登山を取りやめる学校が出てきた。その理由としては、まず第1に、実際に立山登山を行うことで、さまざまな困難が明らかになったことである。例えば、天候が変わりやすいために、予定が狂いやすく、また健康管理も難しいことなどである。第2に、登山者の急増によって立山での団体行動が困難になる一方で、さまざまな教育活動に適した宿泊施設が数多く作られたことである。例えば、射水郡の大島小学校は、立山登山では林間教育の重要な目的である「…寝食を共に、集団生活のきまりを…」を果たせないとして、昭和45年から「有峰青少年の家」で宿泊学習を行うようになった⁶²⁾。

しかし、しばらく中断した後、復活する学校も出てきた。例えば、高岡市立定塚小学校は、昭和41年から昭和50年代まで立山登山を行っていたが、一時期、少年自然の家などでの宿泊学習に代えた。その後、立山登山を復活させようという声が強まり、平成元年から再び行うようになった。貸切バスで室堂に到着後、天候の具合にもよるが1日目に雄山に登頂、2日目に室堂散策という日程で活動している⁶³⁾。高岡市立博労小学校も、昭和56年からしばらく中止していたが、実施を要望する声が強くなり昭和59年

から復活した⁴⁴⁾。また復活する際に、PTAが実施主体となり学校側が協力するという形をとる小学校も増えた。これは、学校側の負担を軽くして、立山登山をしやすくするためであろう。日帰り登山が可能になったことも、登山復活のきっかけになったであろう。

最近では、「総合的な学習の時間」の一環として立山に関わる事柄を学習し、その仕上げとして登山を実施する小学校も出てきた。また、富山県教育委員会が平成11年から「12歳立山夢登山」を実施して小学生の立山登山を奨励するようになって、立山登山を行う小学校が増えたともいわれている⁴⁵⁾。

昭和40年前後に急増したのは、明確な教育的意義

に基づいて行われたというよりも、交通の発達によって立山が観光地として脚光を浴びてきて、周囲の学校がやっているからという雰囲気にならされて行われた側面が大きいのではないだろうか。その後減少したのは、その安易な実施による問題点に気付いたからであろう。実際、この時期には立山への登山者が急増し、交通機関も宿泊施設も立山山頂付近も収容能力を越えるほどになって、とてもまともな登山ができる状況ではなかった。しかし、最近また小学校登山が増加しているのは、積極的に教育的意義を見直し、実施の方法を工夫するようになったからであろう。

おわりに

小・中学校の立山登山は、山好きな教員と理解ある保護者の協力によって行われてきた。そこには、様々な教育的意義への確信があった。立山登山は、太平洋戦争以前には、スポーツとしての楽しみの側面や、高山植物の観察などの科学教育の側面もあったが、当時の中心的な教育理念であった立身出世や忠君愛国の精神を教える側面もあった。戦後になると、そういう道徳教育の側面から開放されて、登山を楽しむ、登山のすばらしさを体験させるために行われるようになった。立山登山には、それぞれの時代の富山県の教育の特色が、かなり色濃く映し出されているといえるのではないだろうか。

また、立山登山の仕方は時代とともに変化してきたが、以前の登山にも目を向ける必要があるのではないだろうか。明治末期は4泊5日で、大正期から昭和初期にかけては3泊4日が多かった。歩行距離が長く、今よりもはるかに大変であったにもかかわらず、別山まで縦走したり、五色ヶ原で高山植物を観察するなど、活動内容は豊富であった。また、最後に立山温泉に泊まってくる場合が多かったが、これは大きな楽しみであったであろう。現在は、交通

の発達によって日帰り登山もできるようになった。しかし、そのために雄山登頂だけという単純な活動内容になっている場合もある。これで立山の魅力が分かったと思わせていないだろうか。

一時期、立山登山を実施する学校が減少したが、最近また、増えてきたといわれている。教育的意義が見直されたためだと思われるが、今後はその効果を厳密に検証していくべきであろう。そこで、その優れた1例として、富山市立堀川小学校の久田潤教諭の教育実践記録を紹介したい。

堀川小学校では、「努力すればその目標をやり遂げた充実感が得られるのが立山登山の醍醐味である」との考えに基づいて、以前から立山登山を行ってきた。そこで今回は、「子供たちとともに、立山登山のめあてを次のように設定した。すなわち、○大自然のすばらしさを体いっぱい感じるとともに、厳しい条件の中で、がんばろうとする自分の姿をみつめる。○『立山縦走』という目標に向かって粘り強く活動を進め、友達と励まし合いながら学年の仲間との絆を深める。○登山の成功を祈る家族や、同じめあてをもって山に向かう人との心の交流の中

で、登山のすばらしさを感じ取っていく」。そして、「子供たちはこの3つのめあてに向かい、立山の歴史や植物研究、体力づくりなどの準備を進め、事前に立山研究発表会や立山班対抗駅伝大会などユニークな行事を企画し、仲間と一緒に立山への気持ちを高めていった」。当日は天候にも恵まれ、児童たちは大きな満足感を得たように思われた。

ところが、4日後に立山登山のことが話題になったときには、満足感や充実感でなく、「意外にも登山で疲れたことや宿舎で楽しくなかったことが話題の中心となった」。そこで、何故このような変化が起きたのか、「一人一人の気持ちを確かめるために、一人一人の思いを文集に綴って読み合うことにした」。その実践を通して、久田教諭は、立山登山に

向かう児童たちの中には様々な不安が立ちこめていることや、それを克服していく児童たちの成長過程をみごとに分析している。そして、欠席した児童の心を押し量り、寄り添っていくまでに成長した生徒を紹介している¹⁰⁾。このように、児童が立山との関わりで成長していく過程を、丁寧に分析する教育実践が続くことを期待したい。

教員たちは、立山に、さまざまな教育的意義を見いだしてきた。その歴史を詳細にたどることによって、今までの立山研究とは違うものが見えてくるのではないだろうか。今回は、資料が不十分だったこともあって雑なものに終わったが、今後、機会があればこれを修正肉付けしたいと考えている。各方面からご教示を賜れば幸いである。

謝辞

本稿の執筆にあたり、富山市立水橋中部小学校、富山市立八人町小学校、富山市立星井町小学校、富山市立五番町小学校、富山市立西田地方小学校をは

じめ多くの小学校から貴重な情報をいただいた。厚く御礼を申し上げる次第である。

註

- 1) 例えば、『富山県史』民俗編(富山県編、1973) 834頁～839頁。『高志人』2巻9号(高志人社、1937) 36頁～48頁などがある。
- 2) 前掲『富山県史』民俗編834頁。
- 3) 『立山案内』(立山登山会編、1917) 2頁。
- 4) 『滑川の民俗上』(滑川市教育委員会、1994) 96頁。
- 5) 『立山権現』(『立山連峰誌料』所収、新興出版社、1991) 6頁。
- 6) 『立山案内』(『立山連峰誌料』所収、新興出版社、1991) 101頁
- 7) 『天の一方より』(『天の一方より』大井冷光作品集) 所収、桂書房、1997) 28頁、35頁。
- 8) 『富山県史』年表279頁。
- 9) 昭和31年6月12日の北日本新聞夕刊と、昭和41年1月9日の北日本新聞朝刊。
- 10) 引率者の5人については、『富山県師範学校同窓会学友会 会員名簿』(富山県師範学校同窓会学友会編、大正12年10月) によれば、金森太次郎は明治32年に富山師範学校第一種講習卒業で、引率者の中でもっともベテランの教師であった。土肥恵治は明治44年富山師範本科第一部卒業、常川敬次郎は明治45年富山師範本科第一部卒業で、まさしく若さにあふれていたといえよう。山崎助三郎については不明である。堀田竹二はこのとき代用教員で、大正3年に富山師範本科第二部を卒業して、正式に教員の資格を取っている。引率者の中では最も若かったと思われる。
- 11) 『富山県教育史』上(富山県教育委員会、1972) 429頁～430頁参照。
- 12) 『創校百星霜』(富山市立水橋中部小学校大成育成会編、1972) 6頁。
- 13) 登山史研究家の山崎安治は、小

- 杉復堂を近代登山の先駆者の1人として高く評価しているが(『日本登山史』白水社、1969刊、161頁～164頁参照。)、小杉は明治15年から明治30年まで富山師範学校の教員であった。小杉の影響で登山好きになった者も多かったと思われる。その1人が、富山県山岳会の草分け的存在とされる吉沢庄作である。吉沢は、明治27年に富山師範学校を卒業しているが、後年、「当時小杉先生から古人は大山名川を跋涉して文の気を養うと云ふ事をよく聞いたものであった」と記している。(母校創立八十周年記念誌。富山教育学窓会編集、昭和28年10月刊)。また後に述べる八人町小学校校長の辻尚村も、小杉の門下生であったと思われる。
- 14) 前掲『富山県教育史』下、9頁。
 15) 『富山県教育史』上(富山県教育委員会、1972)1019頁の表では、明治45年での男子児童の人数は、尋常科で55,296人、高等科で5,244人となっている。尋常科を6学年とし、高等科を2学年と考えると、大まかに計算すると高等科への進学率は中学校への進学者を差し引いても、尋常科卒業生の3分の1未満だと考えられる。
 16) 『日本近代教育百年史』第4巻(国立教育研究所編、1974)936頁。
 17) 『富山県中新川郡教育史』(富山県中新川郡教育会編、1940)25頁。
 18) 前掲『富山県教育史』下、151頁。
 19) また、古くからの売薬と立山修験の関わりも関係しているかもしれない。売薬と立山修験の関わりについては今までも多く論じられてきたが、そのことと立山登山の関係は今のところ不明な点も多く、今後の課題である。
- 20) 『乙巳会十五周年記念号』(1923)12頁。
 21) 註(13)参照
 22) 昭和3年6月30日に、辻尚村が編集兼発行人となって、『復堂先生追悼會記』が作られている。これに追悼会開催の経緯や内容が記されている。
 23) 前掲『天の一方より—大井冷光作品集』324頁。
 24) 昭和4年11月1日に、『辻尚村先生彰徳會紀要』が作られ、その経緯が記されている。
 25) 富山新報、大正13年7月21日。
 26) 当時、富山県では、児童の自発性を重視する大正新教育運動と称される教育運動が積極的に展開され、学校行事も多彩になった。その中で、臨海教育や林間学校は、主として虚弱児の体力増強を目的として行われた。立山登山と目的は違うが、自然の教育的効果を強調している点では共通する部分があることが注目される。『富山県教育史』下、105頁～107頁参照。
 27) 富山新報、大正14年7月27日。
 28) 富山新報、大正15年7月19日。
 29) 富山新報、昭和4年7月27日。
 30) 当時校長であった菊盛永造は、前掲『高志人』2巻9号の中で、立山の思い出を記している。それによれば、菊盛は、中新川郡大崎野の出身で、16歳の夏に村の青年たちと一緒に立山登山をしている。成人儀礼としての登山であったのだろう。菊盛にとって、この登山は忘れられない喜びをともなった思い出であったという。この印象が、同校での立山登山実施にも影響を与えたのではないだろうか。
- 31) 『教育百年史』(星井町小学校教育百年史編集委員会編、1974)360頁に、沿革史からの一部抜粋として記されている。
 32) 富山新報、大正13年7月27日。
 33) 富山新報、大正14年7月21日。
 34) 富山新報、大正15年7月26日。
 35) 前掲『教育百年史』353頁参照。
 36) 富山新報、昭和2年7月26日。
 37) 前掲『富山県教育史』下、10頁～11頁。
 38) 前掲『教育百年史』291頁～292頁。
 39) 『日本人のしつけは衰退したか』(講談社現代新書、1999)47頁。
 40) 前掲『日本人のしつけは衰退したか』50頁～74頁参照。
 41) 立山を教育に利用する動きは、立山登山以外にも見られるようになっていった。皇太子が大正14年の歌会始で『立山の御歌』を詠むとすぐに、富山県では、立山に歌標柱を作る計画が持ち上がったが、県下の教員の大半が加入している富山県教育会は、その募金活動に積極的に関わった。学校を通じて、小中学生から募金を集めた。また同時に、この歌をもとに曲を作り、県下の学校に楽譜を配布した。このあと、富山県の小学校では、集会や儀式のたびに、君が代とともに『立山の御歌』が歌われた。学校によっては、『立山の御歌』

- の一部を校歌に取り入れるところもあった。例えば、富山市立西田地方小学校では1題目の「見よ立山の峯の雪 三つの教えに従いて…」が「見よ立山の峯の雪 雄々しき姿かしこみて…」と改詩された。(『教育の歩み百年史』富山市立西田地方小学校編、1973、32頁、38頁参照)
- 42) 『四方小学校百年史』(富山市立四方小学校百年史編集委員会編、1972) 124頁～125頁。
- 43) 『西田地方小学校百年史』(西田地方小学校創校百周年記念事業委員会編、1973) 40頁。
- 44) 五番町小学校の場合は、昭和6年7月29日の富山新報で上埜富山市長がインタビューで、立山登山をしたときに五番町小学校の児童と教師を見たと言っている。音杉小学校の場合は、昭和7年7月26日の富山新報が、「音杉学童達立山登山」という見出しで紹介している。
- 45) 『富山大学教育学部附属小学校百年史』(百年史編集委員会編、1977) 206頁。
- 46) 『水橋西部百年のあゆみ』(富山市立水橋西部小学校創校百周年記念事業実行委員会編、1978) 43頁
- 47) 『100周年記念誌 たかの』(立山町立高野小学校編、1992) 62頁。
- 48) 前掲『富山県教育史』下、261頁。
- 49) 富山新報、昭和6年7月29日
- 50) 富山新報、昭和5年8月20日
- 51) 『教育の歩み-1966』(水橋町教育委員会・水橋町小中学校長会発行、1966) 72頁。
- 52) 『愛宕小学校の百年』(富山市立愛宕小学校編、1972) 108頁。
- 53) 『移りつつ変わらざるまことあれ、富大付属中五十年』(富山大学付属中学校編、1997) 129頁。
- 54) 『富山教育』402号(富山県教育会編、1954) 28頁～31頁。
- 55) 『創立五十周年記念 芝園のあゆみ』(富山市立芝園中学校同窓会編、1997) 36頁。
- 56) 『城端小学校創校百周年記念誌』(城端小学校記念誌編集委員会編、1973) 161頁。
- 57) 『富山教育』470号(富山県教育会編、1960) 23頁～28頁。
- 58) 『大島の教育百年』(大島町教育委員会編、1974) 190頁～192頁、および『富山教育』463号(富山県教育会編、1959) 32頁参照。
- 59) 『富山教育』425号(富山県教育会、1956) 5頁。
- 60) 『志貴野五十年の歩み』(高岡市立志貴野中学校編、1997) 77頁～78頁、96頁～97頁。
- 61) 『飯野小学校 百年誌』(飯野小学校百年誌編集委員会編、1973) 335頁。『石動小学校百年のあゆみ』(小矢部市立石動小学校編、1973) 97頁など参照
- 62) 前掲『大島の教育百年』192頁。
- 63) 『定塚小学校百年史』(定塚小学校百周年記念誌編集委員会編、2001) 201頁。
- 64) 『博労教育百年の歩み』(博労小学校史編集委員会編、2001) 285頁。
- 65) 平成15年6月26日の教育警務常任委員会での中田生涯学習室長の答弁によれば、県内小学校の立山登山実施状況は次の通りである。
- 平成11年度(59校)平成12年度(72校)平成13年度(64校)平成14年度(81校)。なお、平成13年度の減少は、天候のせいではないかとしている。
- http://1_fs04.hon.pr_ef.toyama.jp/kaigir_oku/ 参照
- 66) 『立山に挑みながら、自分への理解を求めていく子ども』(富山市立堀川小学校、研究紀要70集『個が育つ教育経営-個と歩む授業』所収、1999) 参照。